

町小だより

令和8年
1月26日
No. 704
御免町小学校

外国人力士が大切にした「十の心」

校長 土田 利康

大相撲1月場所が行われ、激戦の中、ウクライナ出身の大関・安青錦が優勝を収めました。現在、「若貴時代」以来の相撲ブームと言われ、連日「満員御礼」の大盛況でした。大の里や伯乃富士など若手力士の台頭が人気を博す一因でしょうが、近年はモンゴルをはじめとする外国人力士の活躍が目にとまります。

「輪湖時代」から大相撲を見ている私にとって、外国人力士というと高見山を思い出します。ハワイ出身、身長190cm超、体重約200kgの大柄な力士で、迫力ある相撲をとり優勝も経験しました。一方、お茶目な性格で万人から愛され、布団のCMなどにも登場していました。引退後は日本国籍を取得し、東関部屋の親方になりました。外国出身の初めての親方です。当時、外国人への偏見などで、「外国人に弟子を預けてよいのか」「日本の国技である伝統や文化の継承が本当にできるのか」という声もあり、大きな重圧を感じていたそうです。

そんな高見山は、東関部屋に「十の心」という標語を掲げていました。

- 一 おはようという親愛の心
- 二 はいという素直な心
- 三 すみませんという反省の心
- 四 どうぞという謙譲の心
- 五 私がしますという奉仕の心
- 六 ありがとうという感謝の心
- 七 おかげさまでという謙虚な心
- 八 お疲れさんという労わりの心
- 九 なにくそという忍耐の心
- 十 嘘をつくなという正直な心



高見山が日本人の心を身に付ける上で最も重視したのは、「相撲は勝ち負け以前に人間をつくる道である」という考えでした。彼は来日当初、日本語も分からず、文化や習慣の違いに戸惑いながらも、師匠や兄弟子の姿を徹底して観察したそうです。特に、礼儀、感謝、我慢、そして集団の和を乱さない姿勢を、言葉ではなく行動から学び取っていきました。土俵での一礼、ちゃんこ番での立ち振る舞い、年長者への接し方など、日常の細かな所作を通じて、日本人の価値観を身体に染み込ませていきました。そして、親方になった高見山は、弟子たちに技術だけでなく、人としての在り方を伝え続けました。

外国人力士が大切にした「十の心」。多様な価値観があふれ、「自分らしさ」や「正しさ」が人によって違う現代だからこそ、東関部屋に伝えられてきた「十の心」は、今、私たちが一度立ち返るべき内容だと感じます。それは相撲の世界だけの教えではなく、人としてどう生きるかを示す、時代の流れに左右されない生き方の基本だと思えるからです。